

臨床研究部便り第6号

臨床研究部長 下田 照文

平成16年5月21日(金)に国立病院機構本部(東京)で臨床研究センター長・臨床研究部長会議が開催されました。臨床研究部の果たすべき役割として、治験の推進、中期目標達成のための臨床研究の推進、臨床研究における安全の確保、臨床評価指標への貢献があげられました。当院臨床研究部の最重要項目は治験の推進と全職種における臨床研究への参加と考えています。この方針に従い、医師だけが研究するのではなく、すべての部門の研究への意識を高め積極的な参加を促す目的で、今年度4月に全部門に「平成16年度臨床研究部研究計画」の提出をお願いしました。その結果、放射線部と栄養管理室から計画書の提出がありました。この2つの部門においては、今後継続的に臨床研究を進め日常の診療に還元できる研究成果を期待しています。看護部、理学療法部、検査科、薬剤科には来年度の提出をお願いします。研究計画の詳細な内容に関しては、後日、業績集とホームページで公表する予定です。

臨床研究部研究室の室長便りを交代で掲載してきましたが今回で最後になります。リウマチ研究室長 吉澤 滋先生にリウマチ研究室の紹介をしていただきます。

リウマチ研究室の紹介

リウマチ研究室長 吉澤 滋

リウマチ研究室は、平成14年4月にリウマチ科が開設に伴い、新たに臨床研究部にリウマチ性疾患の臨床研究を行なう目的で新設されました。臨床研究は、患者さんの日常診療の上に成り立つものですので、この2年間、リウマチ研究室では、臨床症例の蓄積、すなわち入院および外来で、まずはたくさんの患者さんを診療させていただくことに力を入れてきました。院内の多くスタッフの御協力もあり、御陰様で、現在では関節リウマチおよび膠原病の患者さんの紹介も増え、診療活動も充実してきています。

関節リウマチは、約1%の方が罹患するといわれており、比較的多い疾患です。初期には関節の腫脹や疼痛などの関節の症状が主体です。しかし経過中に間質性肺炎などの肺障害や、その他腎障害や皮膚潰瘍、アミロイドーシスなど、全身のいろいろな障害を伴ってることがあり、全身性の疾患として捉える必要があります。肺病変合併の患者が多いのが、当院受診の患者さんの特徴のようです。

関節リウマチの治療法は薬物療法に限れば、最近急速に進歩し、新薬も続々と登場しています。昨年は、レミケードとアラバという2つの新薬が日本でも使用できるようになりました。レミケードは生物学的製剤で画期的新薬として、その有効性も高く期待されています。またアラバは間質性肺炎の副作用が問題となり、新聞報道されたので御存知の方も多いかと思えます。これらの新薬の使用も含め、リウマチの内科的治療は、痛みをどのように押さえるかから、いかに早期から十分な治療を行ない、関節の破壊の進行を押さえるかに治療の目標が変わってきています。その一方で合併してくる肺病変などの治療が問題となってきます。間質性肺炎合併の関節リウマチの患者さんには、多くの抗リウマチ薬が使用禁忌あるいは注意となっており、そのような症例でリウマチ治療をどのようにすすめていくかが今後の一つの課題となっています。

さて、臨床研究部としての活動ですが、先に述べましたように、まずは、臨床部門における症例の蓄積を主体として行なってきました。そのなかで次のようなテーマのもとに現在臨床研究や活動を続けています。

当院関節リウマチ症例の肺病変

びまん性間質性肺炎	27
結核、非定型抗酸菌症	6
肺癌	6
COPD	5
胸膜炎	3
その他	4
肺病変なし	39

合計 90

(間質性肺炎と肺癌の合併例1例を重複集計)

1) 関節リウマチおよび膠原病に伴う肺病変の臨床的検討

先に述べましたように、関節リウマチに伴う肺障害は重要な合併症の一つです。表のように肺病変を伴った患者さんの割合が多いのが当院の特色です。この特色を活かして、関節リウマチの肺病変の臨床研究を展開していく予定です。

2) 関節リウマチのプール療法について

喘息患者さんのプール療法の為の治療用の温水プールを利用して、平成 15 年 6 月より、リウマチ患者さんのためのプール教室を開始しました。32 と水泳時よりも高めの水温にすることで、体が冷えることを抑え、関節や筋肉の緊張を取ります。水中のため重力による関節の負荷が 10 分の 1 になり、膝や足首などが痛くて歩行が困難な患者さんが、容易に歩行できるようになります。水中での水の抵抗を負荷として、水中歩行を行なうことで筋力の増強を図ります。杖歩行も困難な患者さんが、1、2 ヶ月の間に杖も忘れて歩行するくらいに、著明な効果があがっています。現在の参加者は、30 代から 70 代の幅広い年齢層にわたる 7 名に増え、週一回の水中歩行による運動療法を楽しんでおります。参加者が増えてきましたので、今後データの蓄積と解析を行なってプール療法の有効性を検証していく予定です。



3) iR-net による『関節リウマチの内科的治療の検証に関する研究』への参加

国立病院機構における、政策医療の一貫として、免疫ネットワークに参加し、全国規模でのリウマチ患者さんの実態調査のデータ集積に平成 15 年度より協力しています。全国での目標症例数は 1 万症例で、リウマチ患者さんの長期経過を前向き研究で行なっていくものです。当院のエントリー数は、まだ少数ですが、これから数を増やしていく予定です。

以上、リウマチ研究室は活動を始めたばかりですが、今後さらに内容を充実させていく予定です。患者さんあつての臨床研究ですので、紹介や広報などで職員の皆様のさらなる御支援を宜しくお願い致します。